

# 越中からの四国遍路—「道中小遣留帳」を素材に—

Embarking on the Shikoku pilgrimage from Etchu province — examining the contents of “Dōchūkozukaitomechō”

近藤 浩二 (滑川市立博物館)

Koji KONDO, Namerikawa City Museum

The “Dōchūkozukaitomechō” is part of the Ukita family document collection stored at the Toyama Municipal Folk Museum. The Ukita's were a wealthy farmer family who lived in the village of ŌtaHongo in the district of Nikawa of Etchu province (present day area of Toyama prefecture). Among their documents is a record of a retired person in the Ukita family who travelled for 178 days between February 29 and August 29, 1843 to complete the Shikoku and Saigoku pilgrimage. But, unlike other general travel diaries the reasons for traveling, the person's thoughts, places visited, and experiences on the road are hardly mentioned. Instead the author has simply recorded the contents of everyday expenses.

In recent years, the analysis of various kinds of travel diaries has been conducted and as a result, travel conditions during the early modern period have become clear. I believe that when compared with research on the pilgrimage to Ise Shrine and Saigoku that there is still a lot of room to examine travel diaries related to the Shikoku pilgrimage. As well, those who traveled on Shikoku, along the Sanyo road or in the Kinki area were mainly general people from the Western provinces. Originally there were not many from the Eastern provinces that made the Shikoku pilgrimage because geography was the main factor influencing their decision. As a result, it can only be naturally assumed that the numbers of surviving travel diaries are rare. Furthermore, the difficulty of the Shikoku pilgrimage, the need for over 100 days for a return trip and the increase of costs, confirms that making the Shikoku pilgrimage was a limited option for only those in the Eastern provinces who were well off and had strong faith.

Based on these points and due to the lack of research on this topic I believe that examining the “Dōchūkozukaitomechō”, as an example of a record of people from Eastern provinces such as Etchu who made the Shikoku pilgrimage, is quite important. In this paper, based only on the Shikoku pilgrimage of this retired person from the Ukita family, I highlight the expenses for nōkyōchō (pilgrimage book), food and drink, and lodging etc. I have also added a reprint of the entire document to the end of this paper.

## 1 はじめに

四国・山陽道・近畿を出自とした西国民衆が中心層とされる四国遍路について、近世後期、東国民衆によって行われた一事例を越中の人物が残した道中日記から紹介することが本稿の目的である。

新城常三氏は、「東国民衆の四国遍路は、そのみなが、単独におこなわれるのではなくして、西国巡礼またはその他と共に営まれ、それらの延長線上の宗教行為の性格が濃い」、「とりわけ宗教行事としては、西国巡礼との関連性が濃い。(中略) 両者の巡歴により、より大きな効験が期待された」、「(西国巡礼と四国遍路は—引用者註) 非常な苦行と合せて百数十日以上を超える時間、さらに経費の上昇を考えると、東国人の遍路はしぜん経済的に比較的恵まれた者」「純粋な強い信仰心の裏付けなしには、とうてい果たしうるものではない。そこには自ら、数的に限定されたものとならざるをえない」[新城]と指摘している。要するに地理的要因の影響を強く受ける東国民衆の四国遍路とは、強い信仰心を有した富裕層の一部によって西国巡礼と共に行われた限定的な行為ということになる。本稿で取り上げる越中を出自とする遍路を含めた東国民衆による四国遍路が数的マイノリティーに位置づけられることは、遍路の数量的な分析からも明らかである[井上2008]。そうすると絶対数の少なさから必然的に道中日記の残存数も僅少とならざるをえないことが予想され、本稿で紹介する道中日記の史料的価値も決して低いものではない。

また近年、各種道中日記の分析が進み、近世期の旅の実態が明らかになりつつある。その中では苦しさもあるが、明るいイメージ・娯楽性—が提示されることが多い。このようななか、文化6年(1809)の四国遍路道中日記を分析した井上淳氏は、「(分析対象となる道中日記のほとんどが—引用者註) 伊勢参りやそれにとまなう西国三十三カ所巡礼のものであり、そこには一定の偏りが見られる。(中略) これまであまり取り上

げられることがなかった四国遍路の道中日記に着目することで、(中略) 娯楽という文字でくぐられがちな江戸時代の旅の姿を相対化」しようと試みている [井上2006]。

本稿では、先行研究のこれらの点を踏まえながら、支出記録の記載に特化した「道中小遣留帳」(以下、「留帳」と略記する) という道中日記から、近世期の東国民衆による四国遍路の事例を確認していきたい。

## 2 「道中小遣留帳」における四国遍路の概要

「留帳」は、加賀藩領の越中国新川郡太田本郷村に住居した浮田家隠居が、天保14年(1843)2月29日に出発し、8月29日に帰着するまでの旅の記録である。半年間の間に、四国遍路に加え西国33ヶ所巡礼、伊勢・高野山・善光寺参詣も果たし、その間の支出記録が淡々と記されている。道中での感想等は非常に少なく、遍路中においても難所等で辛い思いをしたに違いないだろうが、道中の厳しさや肉体的な苦痛を吐露したような記載は一切見られない。まさに史料の表題通り、道中における支出を淡々と書き留めた内容である。史料を残した浮田家隠居のことや旅の全容については、紙幅の関係上、巻末に付載した史料紹介及び解題を参照していただきたい。

さて、この浮田家隠居の旅は一人旅というわけではなく、史料の全体を見ていると妻が同行していたことは確かである。ただ、長い道中での支払い状況には、もう一人の同行者を匂わすような記載一例えば、出発日の2月29日に富山城下外れで誰かと「まち合候」、3月1日に「同所ニ而津田之茶ノ分払」、4月18日にも「一、拾八文 ゆせん代 壺人ニ付六文ツ、」一もあるが、基本的には浮田隠居夫妻2人分の支出が記載されていたと見られる。

この四国遍路の概要を紹介する前に、「留帳」には書き洩れと見られる部分が散見されることを述べておきたい。例として札所の書き洩れを取り上げよう。ルートを見ると、88ヶ所すべて巡ったと考えて問題なさそうだが、札所へ参拝したことを示す表記が抜けているのである。後述するように、札所で納経帳へ朱印をもらった際には金額と「〇〇ばんさまノ明し」(〇〇番様の証)と表記される。「留帳」では、この表記が札所を訪れたことを示す唯一の情報になるが、これが15ヶ所ほど落ちている。例えば6月11日、「卅一はん様ノ下タ五たいさん村ニ而泊り」と、31番竹林寺の麓の五台山村に泊まったとあるが札所の朱印代は記されていない。6月16日は「三十七はん様ノ所ニ而昼飯たへる さい代」として支出が記録されるも、37番岩本寺での納経帳に関する支出は抜けている。7月5日も46番大宝寺・47番浄瑠璃寺に程近い浄瑠璃寺村に宿泊しながら、両札所の朱印代が見られない。四国まで来て札所を飛ばしながら遍路をしたとは考え難く、これらは単なる書き洩れと捉えたい。なお、西国巡礼中の記載においても同じような状況を確認できる。

以上のことから、記載のない札所も巡っているものと考え、宿泊地や行程を考慮に入れながら補足して本稿を進めていくことをお断りしておく。また、このように、旅の主目的のはずである札所に関して脱漏があることを考えると、他の支出費目にも書き洩れが存在している可能性が非常に高いということも念頭に置いておきたい。

それでは、浮田家隠居の四国遍路の概要を見てみよう。

### (1) 讃岐(5月18日～5月23日)

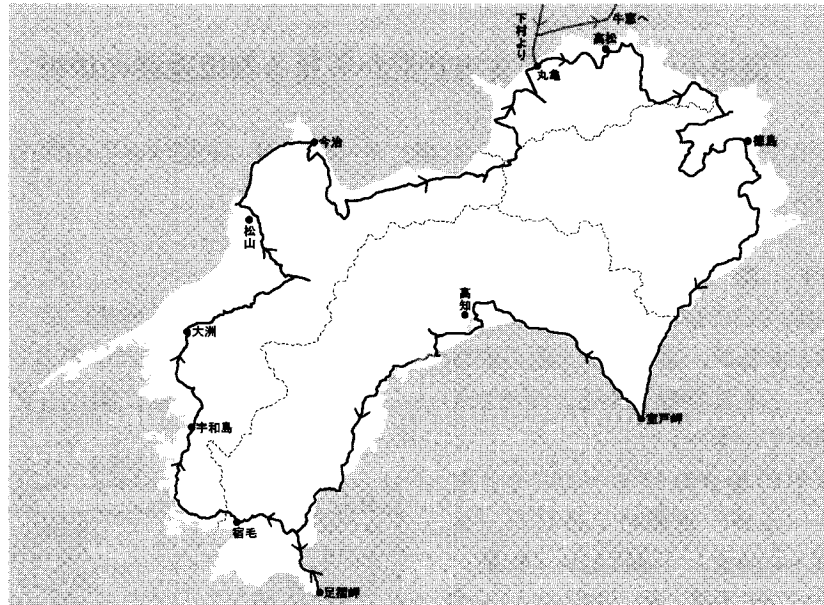
四国入り前日は備前下村の油屋藤右衛門方で丸亀までの船賃160文の支払いも済ませて宿泊している。5月18日、丸亀の船宿・福嶋屋文十郎方に到着すると、船揚り切手(「上り切手」)2人分・150文を支払い、打ち始めとなる78番郷照寺へ向かった。順調に歩みを進め、5月22日には88番大窪寺の参拝を済ませて白鳥山村で宿泊、翌日に阿波へ入る。

【表1】四国内における国別宿泊日数

国	日程	宿泊数	備考
讃岐	5/18～5/23	5泊	
阿波	5/23～6/5	12泊	逗留2日(5/30・6/1)
土佐	6/5～6/24	19泊	逗留2日(6/6・23)
伊予	6/24～7/14	19泊	
讃岐	7/14～7/18	5泊	

### (2) 阿波(5月23日～6月5日)

【図1】 四国遍路の経路



阿波では、まず3番金泉寺へ参詣して近くの大寺村に宿泊、翌日1・2・4～7番を巡り、25日に8～11番、26・27日に12～17番を終えると、徳島城下の二軒屋町へ宿を取った。なお、5番地藏寺には「五百らかん様」と添えられ、13番大日寺では一宮神社の朱印代も支払っている。28日に18・19番、29日に20番鶴林寺を巡るとそのまま鶴林寺の庵に宿泊、翌晦日もそのまま逗留、翌6月朔日は宿泊の記載が抜けているが、支出内容からは行動した形跡がなく、この日も逗留したと見られ、鶴林寺

に計3泊したと考えられる。6月2日に巡拝を再開し、3日に23番薬王寺を参詣して阿波の札所を巡り終えた。4日は「せきこいうら」に宿泊しているが、この場所は不明である。行程から阿土国境—阿波の穴喰、もしくは土佐の甲浦あたり—と考えられるが、ここでは仮に阿波へ含めている。

### (3) 土佐 (6月5日～6月24日)

土佐に入ると、「八浜八坂」の海辺の難所が待ち構えていたはずだが、感想といった類はやはり何も記されていない。ただ、難所を越えた疲労のためか6月5・6日と佐喜浜で2泊している。7日に佐喜浜を出立して土佐で最初となる24番最御崎寺へ到着、この後、順次西へ歩みを進めていくが、最御崎寺では「留帳」には珍しく「この前あなくり不動有」と付随情報が記載されている。なお、土佐では船の利用が何度か見られるが、36番青龍寺から37番岩本寺への道中では浦ノ内湾を航行する船に乗っている。16日に岩本寺の参拝を済ますと足摺へ向かい、20日に38番金剛福寺へ着いた。39番延光寺へは元来た道に戻る「足摺山七里の打もどり」のルートを取り、22・23日と九樹村の善根宿で連泊しているが、これも疲れを癒すためだったのだろうか。24日に延光寺へ参り、土佐での遍路を終えた。

### (4) 伊予 (6月24日～7月14日)

土佐最後の39番延光寺を巡ると伊予へ入り、24日は小山村に投宿する。25日の40番観自在寺を皮切りに伊予での遍路が始まった。順調に伊予での遍路を進める中で、6月29日と7月1・2日は大洲城下近辺でややゆっくりしているように見える。7月6日には51番石手寺など松山城下近郊の札所を巡るが、道後にも立ち寄ることなく太山寺へ向かっていった。そして伊予東部の札所を巡り、65番三角寺の参拝を済ませ奥の院の仙隆寺で宿泊し、7月14日に伊予を後にする。

### (5) 讃岐 (7月14日～7月18日)

7月14日は66番雲辺寺に参りそのまま宿泊、翌日出立し、「三十三丁下り候而安ニ明し」と下ったところの庵でも朱印代を払っている。そして残っていた讃岐西部の札所を巡り、7月17日には金比羅参詣、翌18日に77番道隆寺で打ち納めて結願、丸亀の福嶋屋文十郎方へ戻るといいう行程であった。翌日、播磨の室津町行きの船に乗り四国を出立するも、風か潮が不順だったためか22日の朝に備前の牛窓で下船し、残っていた西国の札所巡礼を再開している。

適宜補足しているが、以上が59泊60日を要した浮田家隠居夫妻による四国遍路の概要である。札所を巡拝しながら、時折、奥の院や道中沿いの寺社等に立ち寄っていたことが支払った朱印代金から分かる。他には金比羅参詣が見られる程度で、道後への入湯や鳴門の渦潮見物、厳島参詣、城下見物といった物見遊山的

な側面はほとんど見られない。

### 3 「道中小遺留帳」の支出状況から見る四国遍路の様相

ここでは、浮田家隠居が利用した宿、日々の食事、納経帳への朱印代や諸雑費等について「留帳」から具体的に見ていきたい。

#### (1) 宿

四国内での宿泊状況を一覧にしたものが【表2】である。宿代には「二人分」と特記されている場合が半数ほどあるが、連泊した土佐の佐喜浜では「二人分」と書かれている日（6月6日）、書かれていない日（同5日）ともに同額である。そのため「二人分」の表記の有無に関わらず、すべて2人分の代金とみなして稿を進めていきたい。

有償の場合は15文～320文となっているが、高額な7月17日（金毘羅・320文）と同18日（丸亀・200文）は「宿」や「宿ちん」と特記しており、また後述する米の購入もなされていない。このことから、この2ヶ所については食事付きの旅籠だったと考えられる。その他については木賃宿、茶堂や庵、善根宿だったようだ。順に見ていこう。

全体の7割を占めるのが木賃宿で、代金は24～40文だった。ただし、この範囲内から外れる讃岐の白鳥山（90文）、阿波の大寺（60文）、土佐の黒耳（15文）、伊予の久万町（100文）もあるが、共通する点は宿泊料に加えて米1升程度の支出が日々見られることである。浮田家隠居の旅は、全体を通して木賃宿の利用が大半を占めたが、四国外での木賃料は概ね100文（1人・50文）前後、最も安価な場合でも60文（同・30文）ということから、四国の木賃宿料が非常に低額となっていることが際立つ。つまり、1人当たり12～20文で木賃宿に宿泊できていたということになる。

次に庵や茶堂だが、史料上に出てくる「安」「安しつ」「安寺」といった記載が庵、「茶所」「茶上」が茶堂を指すと見られる。これらの利用の際も、当然だが米1升程度の支出が付け加えられ、庵の料金は24～30文（1人・12～15文）、茶堂は24～40文（同・12～20文）であり、この支払いは灯明銭かもしれないが、「留帳」においては低廉と言われる堂庵の宿泊料が木賃宿とあまり変わらない。

【表2-1】宿泊状況（讃岐）

月日	宿泊地	現市町村	宿泊場所	代金(文)
5/18	鴨	坂出市	酒屋助三郎	0
5/19	記載無し	(高松市付近)		-
5/20	牟礼	高松市(牟礼町)	水門屋藤右衛門	40
5/21	井戸	三木町	伝蔵	30
5/22	白鳥山	東かがわ市(白鳥町)		90

【表2-2】宿泊状況（阿波）

月日	宿泊地	現市町村	宿泊場所	代金(文)
5/23	大寺	板野町	角屋弥右衛門	60
5/24	吉田	阿波市(土成町)		30
5/25	敷地(長戸)	吉野川市(鴨島町)	庵	24
5/26	広野	神山町	地藏寺	30
5/27	二軒屋町(徳島)	徳島市	茶屋	40②
5/28	中角	勝浦町		30②
5/29	20番鶴林寺	勝浦町	庵	30②
5/30	20番鶴林寺	勝浦町	庵	30②
6/1	記載無し(鶴林寺か)	勝浦町	(庵か)	-
6/2	南荒田野(月夜)	阿南市		24②
6/3	橘	牟岐町		30②
6/4	せきこいうら(不明)	海陽町(穴喰町)、東洋町付近		36②

【表2-3】宿泊状況（土佐）

月日	宿泊地	現市町村	宿泊場所	代金(文)
6/5	佐喜浜	室戸市		24
6/6	佐喜浜	室戸市		24②
6/7	西寺(黒耳)	室戸市		15②
6/8	奈半利	奈半利町	かめや今蔵	32②
6/9	穴内	安芸市	彦一	36②
6/10	大谷	香南市(野市町)	かしや大蔵	32②
6/11	五台山	高知市		36②
6/12	長浜	高知市		32②
6/13	宇佐	土佐市		32②
6/14	神田	須崎市		36②
6/15	床鍋	四万十町(窪川町)		24②
6/16	拳川	黒潮町(佐賀町)		32②
6/17	浮津	黒潮町(大方町)		32
6/18	津蔵淵	四万十市(中村市)		30②
6/19	大岐	土佐清水市		32
6/20	伊佐	土佐清水市	弁治	32
6/21	下ノ茅(一之瀬)	土佐清水市	庵	28
6/22	九樹	四万十市(中村市)	儀兵衛	0
6/23	九樹	四万十市(中村市)	儀兵衛	0

【表2-4】宿泊状況(伊予)

月日	宿泊地	現市町村	宿泊場所	代金(文)
6/24	小山	愛南町(一本松町)	豊蔵	120(*)
6/25	栢	愛南町(内海村)	ゆくの助	30
6/26	祝森	宇和島市	喜兵衛	30②
6/27	成家	宇和島市(三間町)	定吉	30②
6/28	東多田	西予市(宇和町)	三瀬	30
6/29	北只	大洲市	岩次郎	40②
7/1	大洲	大洲市	ふるや豊治郎	0
7/2	柚木	大洲市	伝太夫	30②
7/3	臼杵	内子町	弥三郎	0
7/4	久万	久万高原町(久万町)		100②
7/5	浄瑠璃寺	松山市	たき右衛門	30②
7/6	太山寺	松山市	弥作	30②
7/7	北条	松山市(北条市)	上や藤吉	30
7/8	円明寺(54番延命寺)	今治市	茶堂	30②
7/9	桜井	今治市	丞之助	30②
7/10	60番横峰寺	西条市(小松町)	茶堂	24②
7/11	大町	西条市	茶木やとら蔵	40②
7/12	小林	四国中央市(土居町)	国助	30②
7/13	65番奥の院仙隆寺	四国中央市(新宮村)	通夜堂	24

(\*)米1升代込み

【表2-5】宿泊状況(讃岐)

月日	宿泊地	現市町村	宿泊場所	代金(文)
7/14	66番雲辺寺	徳島県三好市(池田町)	茶堂	30
7/15	岡本	三豊市(豊中町)	天神太右衛門	0
7/16	74番甲山寺	善通寺市		0
7/17	金毘羅(松尾)	琴平町	孫一	320
7/18	丸亀	丸亀市	福嶋屋文十郎	200

1) 現市町村の( )は、平成の大合併前の自治体名。

2) 代金の②は「二人分」の表記が有ることを示す。

もう一つの宿泊形態の善根宿であるが、善根宿と明らかなものは4泊(3ヶ所)であり(6月22・23日「ぜんこんニ泊り候」、7月3日「せんこんやとう」、7月15日「せんこん宿」)、特記はないが宿泊料金の発生していない例も3泊(3ヶ所)見られる。これは推測でしかないが、浮田家隠居は善根宿という宿泊形態を当初知らなかった可能性が考えられる。遍路を開始した初日(5月18日)の宿は鴨村の酒屋助三郎方だったが、「留帳」には「かも村酒屋助三郎殿方ニ止宿仕候」と記した。宿泊先の人名に「殿」といった敬称を付けている例は他には無く、始まったばかりの遍路道中で不意に遭遇した無償の宿泊という好意に対して、感謝の意を表した記載なのかもしれない。このような経験を得るなかで、善根宿というものを認識していったのだろうか。

さて、これらの状況から宿泊状況をまとめると、浮田家隠居は木賃宿を中心に庵・茶堂、善根宿を組み合わせながら泊まり歩くスタイルで2ヶ月間の遍路を行ったということになる。

## (2) 食事・その他飲食

食事付きの旅籠に泊まるのが少なく木賃宿等の利用が中心だったことから、必然的に自炊を要することになる。先に少し触れたが、毎日のように米1升程度を購入、もしくは善根等によりながら入手している。米価も国によってそれぞれ異なるが、1升当たりの価格は讃岐では80~108文(平均値89文)、阿波が90~105文(同98文)、土佐は84~145文(同120文)、伊予で80~107文(同93文)となっており、他と比べ土佐が高い。また、1日の米の入手量も土佐の足摺周辺から若干ながら減り、7~9合程度の量になる日が増えてくる。ちょうど暑くなる時期に道中の疲れも加わり、食欲が落ちていたのだろうか。他には麦を買っていることもあるが、これは例が少ない。主食の米に加え、副菜となるものもたびたび購入しているが、「さい」(菜)とだけ記されていることが多く、具体的には分かり辛い。ただ、梅干・香の物、「大こん」(大根)や「大こん付」(大根漬)、酢・醤油・味噌といったものを入した表記がある。

次に接待による食べ物入手だが、多くは米である。例えば2合の接待を受けたときは別に8合を購入しており、日々の食料の足しとなっていた。7月7日は「今日ハせいたい御座候ニ付夕はん朝飯

【表3】善根(飲食物)の状況

国名	月日	場所	接待内容	備考
讃岐	5/19		米2合	「むらい候」
	5/20		米1合5勺	「むらい候」
阿波	5/25	10番札所	大根漬	「大こん付参候」
	6/13		米4合	「たくはち(托鉢)米」
土佐	6/14		米5合	「たくはつ米」
	6/15		米9合	「むらい候」
伊予	7/2		米1升	「むらい候」
	7/7	北条町(木賃宿)	夕飯・朝飯	「今日ハせいたい(接待)御座候ニ付夕はん朝飯いたシ不申候」

いたシ不申候」と宿で接待があったようで、木賃宿ながら食事の支度が不要だったため、この日は米を購入していない。また、6月13・14日はそれぞれ「たくはち米」「たくはつ米」として記されており、実際に托鉢をして入手し、接待による「むらい候」「もらい候」米とは異なることを表しているのかもしれないが、詳

細は不明である。このように無償で入手した食べ物のほとんどが米であったが、10番切幡寺では大根漬けが出てきたようだ（「此ノ御寺ニ而大こん付参候」）。

昼は茶屋等で食べることもあったようで、単に「昼飯」とだけ書かれていることもあるが、そうめん・うどんといった麺類、麦碗飯（「ばくわん飯」）や麦飯も食している。茶菓子類としては、まんじゅう（「万しやう」）、餅・焼餅、はったい粉（「麦入粉」「はたい入粉」）、菓子、ところてん（「とゝろてん」「こゝてん」「こゝろてん」）、黒砂糖、桃、西瓜、砂糖水（「さと水」）、飴、これらと一緒に支出される例が見られる「上せん」（上撰茶か）といったものも見られる。食べ物かどうか不明だが、他の飲食物と併記されることが多い「た子」「たこう」、「すゝ」といったものもある。

最後に飲酒状況にも触れておきたい。遍路中の飲酒がどこまで一般的かは分からないが、浮田家隠居は酒を1～2合飲むことがあった。道中における飲酒日数は【表4】の通りだが、遍路中は3日に1回程度、遍路の前後は2日に1回程度のペースで飲酒している。どうも遍路中は、精進のためか疲労のためかはっきりしないものの、やや飲酒ペースを落としている状況が看取できる。遍路中における飲酒という行為をどのように位置づけるべきかは今後の課題として、ここでは状況を提示するにとどめておきたい。

【表4】道中における飲酒状況

時期	総日数	飲酒日数
遍路前	77日	39日
遍路中	5月	13日
	6月	29日
	7月	18日
遍路後	37日	20日

【表5】札所ごとの朱印代

### （3） 納経帳・消耗品・雑費等

札所を訪れると納経帳に朱印をもらい代金を支払うが、先に触れたとおり、「留帳」には金額と「〇〇ばんさまノ明し」（〇〇番様の証）と表記される。その代金を一覧にしたのが【表5】である。現代ではどの札所でも同一料金だが、「留帳」を見る限り、札所ごとに差が生じている。阿波では8～18文だが、10～14文という札所が多く存在している。土佐は6文～35文と差が大きい。室戸近辺が高額であり、高知城下近くは6文とかなり下がるが、土佐西部へ向かうにつれ上昇する。伊予は6～18文となっているが、53番円命寺以降はすべて6文である。讃岐は6～20文で、66番雲辺寺だけが6文、伊予に近い西部は8文と低く、80番国分寺以降は倍以上の16～20文という額になる。

消耗品や雑費については、遍路初日に札入れ、茶碗2つに木綿1尺等を購い、道中ではろうそくやちり紙を購入している。草鞋は計105束、1文につき5～15文で、1束ずつ買うこともあれば複数束まとめて買うこともあった。また遍路道中で髪結い（「かみゆちん」「かめゆへちん」）を4回しているが、いずれも20文もしくは21文と代金に地域差は見られない。詳細不明な費目が幾つかある中で、「そうこし」「そうとし」というものが6～8文で幾度か出てくるが、詳細不明である。

他には川渡しを中心に船賃が8回出てくるが（【表6】）、うち7回が土佐である。ただ、ほとんどが「舟ちん」とだけの記載であり、行程から場所を推測していかなければならないが、6月14日の70文については「うさうら町より横なミ村迄舟ちん」とあり、宇佐浦町から横次村ま

阿波		土佐		伊予		讃岐	
1番	14文	24番	25文	40番	10文	66番	6文
2番	14文	25番	35文	41番	-	67番	8文
3番	14文	26番	35文	42番	-	68番	8文
4番	13文	27番	22文	43番	-	69番	8文
5番	13文	28番	-	44番	9文	70番	6文
6番	13文	29番	6文	45番	18文	71番	8文
7番	13文	30番	-	46番	-	72番	8文
8番	10文	31番	-	47番	-	73番	8文
9番	10文	32番	6文	48番	8文	74番	8文
10番	10文	33番	無記載	49番	10文	75番	-
11番	12文	34番	15文	50番	8文	76番	8文
12番	14文	35番	15文	51番	18文	77番	8文
13番	12文	36番	12文	52番	8文	78番	10文
14番	12文	37番	-	53番	6文	79番	-
15番	10文	38番	-	54番	6文	80番	20文
16番	10文	39番	18文	55番	6文	81番	20文
17番	-			56番	6文	82番	20文
18番	8文			57番	6文	83番	16文
19番	10文			58番	6文	84番	16文
20番	18文			59番	6文	85番	18文
21番	11文			60番	6文	86番	-
22番	11文			61番	6文	87番	-
23番	10文			62番	6文	88番	20文
				63番	6文		
				64番	6文		
				65番	6文		

1) 「-」は記載脱漏の札所。

【表6】四国内における船の利用状況

国	月日	船賃	備考
土佐	6/5	15文	野根川もしくは佐喜浜川か
	6/11	10文	物部川か
	6/11	3文	国分川か
	6/13	2文	仁淀川か
	6/14	8文	海路(竜ノ渡)か
	6/14	70文	海路
	6/18	24文	四万十川
伊予	7/2	2文	肱川か

で浦ノ内湾を航行する海路だったことが分かり、6月18日に関しても「四万十川」と明記してある。他の道中日記の分析によると土佐で20ヶ所前後、伊予1ヶ所（肱川）、阿波でも船渡しの場所があったようだが〔北上2006〕、「留帳」に記載された船賃は以上である。

#### （4） 経費・日数

浮田隠居は四国内、四国外を問わず、ほとんどが銭で支払いをしている。半年間にもわたる旅程に、大量の銭を持ち歩くことは現実的ではない。銭をどのように用立てていたかという点、「留帳」に「式朱売候」「式朱売申候」とあることから、二朱金を宿泊先や札所等で銭と交換していたようだ。天保の改鋳頃の公定相場は、金1両（16朱）＝銭6500文であり、つまり1朱＝406.25文ということになる。1朱当たりの換金率は讃岐で400～414文（平均値409.6文）、阿波が414～414.5文（同414.4文）、土佐では396～408文（同404文）、伊予で415～425文（同419文）となっており、土佐が若干低い。ただし、この両替の記載についても支出状況と照らし合わせると、書き洩れが発生していると見られる。

「留帳」に記された遍路中の支出総額を計算すると15貫2文（約2両3分）になるが、最初に触れたように書き洩れがあることからプラスアルファも考慮すると、浮田家隠居の遍路経費は1人につき1両2分程度だったと見られる。道中日記の分析から経費の算出が先行研究でもなされており〔新城、愛媛県生涯学習センター2001、佐藤〕、道中日記を残す階層ということで富裕層が対象となるが、これらは1人につき1両程度と算出している。ここから、浮田家隠居の経費は富裕層の平均値、もしくはそれを若干上回る程度であったと考えられそうだ。

最後に浮田家隠居が四国遍路に要した59泊60日という日数だが、こちらも先行研究〔新城、愛媛県生涯学習センター2001、佐藤〕ではおおよそ2ヶ月程度であり、平均的な日数だったと言える。遍路の道中日記の絶対数がまだまだ少なく、今後も分析の余地はあるだろうが、「留帳」は富裕層のある程度平均的な四国遍路の様相を呈していると評価しておきたい。

## 4 おわりに

東国民衆によって行われた四国遍路の一事例を、越中の人物が残した「留帳」から見てきた。新城常三氏は東国民衆の四国遍路を、強い信仰心を持った富裕層が西国巡礼とともに行う数的に限定されたものと定義しているが〔新城〕、同じ四国でも多くの東国民衆が参加したとされる金比羅参詣との一番の相違点を考えてみると、やはりその苦行性に行き着くように思える。なぜ遠方から四国での苦行を志したのかを考えると、信仰心の発露という点に結びつくだろう。

浮田家隠居の道中には、四国遍路の前後に計4ヶ月の道中も存在している。物見遊山的な旅として語られることが多い伊勢参詣、京都・大坂といった都会へも行っているが、娯楽的要素が皆無という訳ではないものの、一般的に語られる近世期の旅と比して遊樂の側面が非常に薄い。伊勢では伊勢山田と二見浦で一晩ずつ旅籠に泊まり、内宮・外宮と朝熊山等に参詣した上で出立した。京都では二条城という記載は見えるが基本的には西国の札所巡り、宿泊も米1升の支出を伴っていることから木賃宿を利用していた。大坂では旅籠に2泊している。札所が存在する京都市中とは異なり、行程から外れる大坂市中へわざわざ足を運ぶということは行樂的な側面を孕む。実際、道頓堀で芝居見物をしているが、旅全体でこの程度の娯楽しか確認できない。都会見物といった遊樂的要素を最小限にまで抑えていることが特徴的である。伊勢・金比羅参詣といった「娯楽という文字でくくられがち」な旅とは本質・目的が大きく異なる道中だったように見える。つまり「留帳」に見る浮田家隠居の旅は、物見遊山の側面【俗性】は薄く、純粋な信仰心【聖性】に基づく旅だったと言えないだろうか。

信仰心に加え東国民衆が抱く四国への物理的・心理的な距離感が、四国遍路に対する【聖性】を高め、それが前後の道中にも一定の影響を与えたと仮に考えてみると、遍路の出自圏による心性の問題というものも存在するのかもしれないが、この点を述べるには本稿では果たし得なかった東国民衆による遍路道中日記のさらなる発掘・分析等が必要になってくる。

本稿が、十分な道中日記研究になりえていないことは承知しているが、「留帳」が今後の四国遍路・西国巡礼研究に資することを期待して擱筆したい。

〔主要参考文献〕

新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1982）

『愛媛県の地名 日本歴史地名体系39』（平凡社、1980）

『高知県の地名 日本歴史地名体系40』（平凡社、1983）

『香川県の地名 日本歴史地名体系38』（平凡社、1989）

『徳島県の地名 日本歴史地名体系37』（平凡社、2000）

富山市郷土博物館『富山市郷土博物館史資料集13 浮田家文書目録』（富山市教育委員会、2001）

『四国遍路のあゆみ（平成12年度遍路文化の学術整理報告書）』（愛媛県生涯学習センター、2001）

『伊予の遍路道（平成13年度遍路文化の学術整理報告書）』（愛媛県生涯学習センター、2002）

『遍路のこころ（平成14年度遍路文化の学術整理報告書）』（愛媛県生涯学習センター、2003）

井上淳「道中日記にみる四国遍路―「四国西国順拝記」を中心に―」（『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』11、2006）

佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』（人文書院、2006）

井上淳「近世後期における四国遍路の数量的考察―「於仏木寺接待」の分析―」（『「巡礼と救済―四国遍路と世界の巡礼―」公開シンポジウム・研究集会プロシーディングズ』、2008）